

分かる喜び 学ぶ楽しさ

小千谷市立千田小学校

1 はじめに

将来の予測が難しい社会の中でも、伝統や文化に立脚した広い視野をもち、「志高く未来を創り出していく力」を育むことが求められている。つながりの中で学び、自らの人生や社会をよりよく変えていけるという実感は、未来への希望につながる。豊かな自然や伝統、誇れる文化に包まれる小千谷の地で、私たちは、子どもたちが豊かな未来を創るために必要な力を獲得していくことを願い、研修を積み重ねた。

子どもたち一人一人は、多様な可能性とニーズをもった存在である。子どもたちが充実した人生と新しい時代を創り出すための基盤になるものとして、私たちは今年度、「分かる喜び 学ぶ楽しさ」をテーマとして掲げた。そして、2,030年の社会と子どもたちの未来を見据えつつ、年間1,000時間の授業に取り組んできた。人間が学ぶことの本質的な意義を問い直し、「何ができるようになるか」「何を・どのように学ぶか」の視点から、授業の質を学校体制で継続的に高めてきた一年間である。

II 学習指導改善の取組

1 研究テーマ

「分かる喜び 学ぶ楽しさ」

2 テーマ設定の理由

当校の教育目標は、「心豊かに たくましく 伸びゆく子」である。そして、「花と太陽と風のある学校」をキャッチフレーズとし、「花」は温かい心、「太陽」は学ぶ力、「風」は強い体を表し、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな子どもの育成を目指している。

特に、「太陽（学ぶ力）」の中では、「学ぶ楽しさ」を基礎・基本の確実な定着、「分かる喜び」を興味・関心を引き出し、思考力を育てる授業改善に焦点を当てて行うこととした。

3 具体的な取組

(1) 校内研修

① 日々の授業改善

- ・ 授業チェックリストにより、毎月末に自身の授業を評価する。
- ・ 「思考深める学習活動」を意識して、授業の質的向上を目指す。

② 公開授業

- ・ 学級担任が授業を公開し、協議会（全教員参加）において授業分析をする。

③ 学校全体で取り組む4視点

＜視点1：身に付けたい力の明確化と単元構想＞

- ・ 子どもの学習履歴やつまずきの原因を把握する。
- ・ ゴールの姿実現のための学習活動の流れを計画する。

[illegible]

＜視点2：学ぶ意味が分かる授業の構想＞

- ・ 子どもの興味・関心や学ぶ意欲を引き出し、「問い」が生まれるような導入の工夫をする。
- ・ 本時の目指すところを子どもとともに設定してから学習したり、授業者が本時のねらいを明確にもって指導したりする。

＜視点3：思考を深める言語活動＞

- ・ 自分の考えをもち、話し合いや書く活動を計画的に行う。
- ・ 目的を明確にして話し合いを進める。

目的→「異なった意見や考えをいくつかに集約する」
→「自分にはない考えを知り、新たな気づきを得る」

- ・ 思考が深まるようなグループ編成を工夫する。

＜視点4：意欲を高め、学びをつなげるまとめと振り返り＞

- ・ 本時で学んだことが明確になるまとめ、キーワードを使つての振り返りや学習作文を書くことにより、自分の向上や変容を自覚できるようにする。

④ 改善策が明確になる協議会

- ・ 授業者の提案と子どもの姿をもとに、各自が自己改善策を明らかにする。
- ・ 協議会を受けて、授業者と研究主任が授業の考察をまとめる。

《 研修日程 》

4月	・ 研修計画立案と方針説明 ・ 中越教育事務所「授業改善のポイント2016」の確認 ・ 授業チェックリスト作成（毎月末に振り返り）
6月	○ 6/14・15 学習指導改善調査、終了後結果分析 ○ 6/27 2学年1組授業公開
7月	○ 7/11 2学年2組授業公開
9月	○ 9/12 1学年授業公開 ○ 9/26 5学年授業公開
10月	○10/31 4学年授業公開
11月	○11/4 特別支援学級授業公開 ○11/24 3学年・6学年授業公開 《学習指導改善調査研究事業協力校授業公開》
1月	○学習指導改善のまとめ、研修の成果と課題 ・年間指導計画見直し

(2) Web配信集計システム・月例テストの実施

- ① 定着状況の継続的な把握により、日々の指導法の改善につなげる。
- ② 低学年は、担任が月例テスト（国語・算数）を作成・実施する。基準点に満たない場合は、補充指導実施により基礎学力を高め、意欲につなげる。
- ③ Web配信問題計画表をもとに朝学習等を活用した復習を計画的に行い、テスト・振り返りをする。昨年度の結果を踏まえて、単元に入る前に間違いやすい問題を把握し、指導に生かす。
- ④ Web配信集計システムの結果分析により、補充すべき内容を明らかにし、繰り返し指導する。サポート問題を確実に実施し、学習内容の定着を図る。また、結果を毎月家庭に知らせる。その際、子どもの努力と成長を保護者に伝え、次への意欲につなげる。

(3) 中学校区の取組、朝学習等

- ① 小・中連携プロジェクトの取組として、家庭学習強調週間（6/9～6/16、11/18～11/15）を設定し、家庭学習の習慣化を図る。
- ② 基礎学力定着のために朝学習、朝読書（15分間）を計画的に行う。

Ⅲ 校内研修の取組から

実践1 第3学年 理科「明かりをつけよう」より

1 授業改善の視点

本単元は、「電気による明かり」という、児童にとって身近に感じられるものを題材としている。そこで、日常生活の中で使用しているものを活用して、より興味関心を引き出せるようにしていきたい。その中で、自分らしい予想を立てながら実験に取り組むことで、児童自身が学ぶ楽しさを実感できるように支援していきたい。また、「明かりをつける」という課題を達成するために、つなぎ方や電気を通す物質を比較しながら考えていくことで、分かる喜びを感じながら活動していくことを期待する。

本学級は、進んで調べ、積極的に自分の考えを述べる児童が多い。そのよさを大切にして、自分の考えを様々な方法で試す場面を多く設定していく。さらに、自分が考えた方法や結果をグループの友達や学級全体に伝えていくことで、友達の考えのよさや自分の考えの確かさに気付いていけるようにしていきたい。

2 研究の内容・方法

○ 個人の発想を大切に試行錯誤していく活動

本単元は、児童にとって身近なものである「電気による明かり」である。そこで、児童の生活の中でよく使っているものを活用した実験を設定していく。回路を活用して、電気を通すものと通さないものを調べる実験では、文房具や遊具など、よく使われているものを多く用意する。さらに、表面を加工してあるため電気を通さない金属や金色の折り紙を使った実験を提示する。児童が自分らしい発想を活かして、試行錯誤しながら電気を通すものと通さないものの共通点を見付けられるように支援していく。

○ グループでの伝え合いから問題解決をしていく活動

児童が自分の考えだけで問題を解決するのではなく、友達と意見を伝え合うことから自分の意見と比較して考えをまとめる活動を設定していく。その際には、付箋などを活用したり、意見交流の手助けとなるシートを工夫したりするなどの支援をしていく。

3 実践の概要

(1) 単元名 「明かりをつけよう」

(2) 単元の目標

- 電気を働かせたときの現象に興味・関心をもち、比較しながら調べ、見出した問題を追究したりものづくりをしたりする活動を通して、電気の性質についての見方や考え方を育てる。

(3) 単元の指導計画（全6時間）

次	時	学習活動	教師の支援
1	1	・明かりをつけるには、どんな物が必要か考える。 ・どのようにつなげば、豆電球に明かりがつくか話し合う。	・身近に使われている明かりを複数用意して、学習の見通しがもてるようにする。 ・自分で考える時間と話し合う時間だけでなく、話し合いから試す場面を設定する。
	2	・豆電球に明かりがつくつなぎ方と明かりがつかないつなぎ方を調べる。	・様々なつなぎ方を試すことができるように、導線やつなぐためのセロハンテープなどを複数準備する。
	3	・ソケットを使わなくても、明かりがつく方法を考え、調べる。	・ショート回路での事故を防ぐために、活動前に注意し、机間支援で注意していく。 ・2人1組のペアで実験を行い、話し合いながら問題解決できるように支援する。
2	4	・回路の途中で身の回りにある物を入れて明かりがつくか調べ、電気を通す物の共通点を理解する。	・児童の身近にあるものを多く用意して、試しながら問題解決できるようにしていく。

	5	・金属の表面を加工したものでも、電気を通すための方法を考え、試しながら電気が通るか調べる。	・表面に木工用接着剤を被せた金属や金色の折り紙などを用意し、前時の結果と比較しながら問題解決できるように呼びかける。
3	6	・電気や物の性質を利用してスイッチを作り、明かりのつくおもちゃを工夫して作る。	・担任が作ったおもちゃを提示し、見通しがもてるようにする。 ・今までの学習を基に、回路を切るためのスイッチの作り方を話し合う場を設定する。

(4) 授業の実際（4，5時）

①個人の発想を大切に試行錯誤していく活動

第4時では、身の回りにある空き缶やアルミホイル等、教室の中に あるものを何でも試して電気が通るか調べる実験を行った。児童は、意欲的に自分が予想したものを試し、電気が通ったものと通らなかったものを分類した。そして、電気がついたものの共通点から、「金属でできているものは電気を通す」という考えを導き出すことができた。



第5時では、金属であるが表面を加工しているため電気を通さないものを題材にして実験を行った。用意したのは、表面に木工用接着剤を被せた金属板と金色の折り紙である。児童は、同じグループの友達と考え、鉛筆やはさみ、紙やすりなどの道具を活用し、試行錯誤しながら、何とか金属に電気を通して明かりをつけようと意欲的に活動した。はさみで表面をこすっていたグループは、接着剤や塗料が削れ、金属が露出して電気が通ると、「表面を削れば電気が通るのではないか」と予想し、更に削って明かりをつけることができた。また、金色の折り紙は、金属と同じように光っているが紙である。児童は「本当に明かりがつくのかな」と、不安な様子であったが、金属板での経験を基にして、表面を削ることで、金色の折り紙に電気を通し、明かりをつけることができた。

②グループでの伝え合いから問題解決をしていく活動

児童が自分の考えだけで問題を解決するのではなく、友達と意見を伝え合うことから自分の意見と比較して考えをまとめる活動を設定した。自分の考えを付箋に記述し、グループ内で付箋の内容を話し合って問題解決していくように支援した。児童は、話し合いを通して、同じ考えの友達の意見から自信を高めたり、自分と違う意見から新たな考えをもったりすることができた。また、学習の最後には、グループの意見を集約したシートを活用して発表し合うことで、学級全体の考えをまとめていくことができた。



このような伝え合う活動は、他の学習でも有効な手立てとなる。今後も、意図的に伝え合う活動を設定していきたい。

4 まとめ

身近な物を活用した実験を行うことで、児童は意欲的に取り組むことができた。特に、「金色の折り紙に電気を通す」実験では、接着剤を被せた金属板に電気を通した経験を活かして問題解決し、自分の考えに自信をもって取り組むことができた。このような教材の工夫をすることで、児童の発想を大切に学習を行うことができた。

本実践では、グループや学級全体での伝え合いを大切にしてきた。児童は、友達の意見から自分の意見のよさを再確認したり、新たな考えをもったりすることができた。しかし、何をどう伝えればよいのか不明確だったため、十分な伝え合い活動ができなかった場面もあった。課題や伝え合う内容を事前に学級全体で明確にしたり、机間支援でより実態に応じた声かけをしたりする必要があった。今後も伝え合う活動を充実させていくために、課題設定や内容の共通理解を大切に授業実践をしていきたい。

1 授業改善の視点

ゴール型ゲームの一つであるサッカー型ゲームを体育学習に取り入れる際、「児童の経験や能力の差」「硬いボールでの痛さや怖さ」「キーパーになった児童への勝敗の責任」などで児童の意欲に大きな差が出る。そこで、どの児童も意欲的に取り組むことができるサッカー型ゲームになるよう、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた教材を工夫する。また、児童の話合いから、学級全体が楽しめるルールづくりができる場を設定する。このような支援をしていくことで、どの児童も主体的に取り組む、サッカー型ゲームの楽しさや喜びを味わうことができると考えた。

2 研究の内容・方法

○ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた教材、教具の工夫

サッカーは児童にとって人気のあるスポーツである。社会体育で取り組んでいる児童や休み時間にサッカーボールで遊ぶ児童が多い。その反面、苦手と感じている児童もおり、体育の授業で取り組む場合、得意と感じている児童が多くボールに触れ、苦手と感じている児童はボールを避ける傾向にあった。そこで、苦手と感じている児童がその理由と考える要素を排除し、誰もが楽しめるような教材、教具を取り入れることとした。

ここでのユニバーサルデザインとは、経験の有無にかかわらず、誰もが（ユニバーサル）楽しめるという意味である。ニュースポーツの一つである「ユニバーサルホッケー」のルールなどを参考にして、教材、教具を工夫することとした。

○ 視点を明確にした話合い活動

チーム編成やルールを「みんなが楽しむために」という視点から話合い、自分たちでルールを考えながら取り組めるように支援していく。また、新たなルールで試合をした後には振り返りの場を設定し、さらに、ゲームを通して気付いたことを基に、児童自身がルールを改善できるようにした。

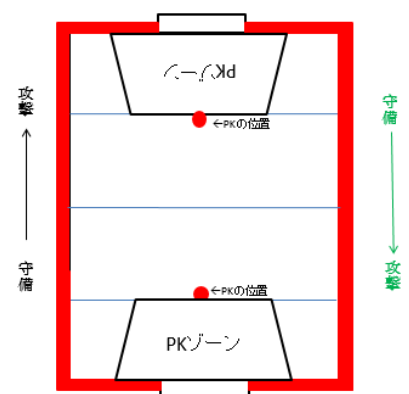
3 実践の概要

(1) 最初に提示したルールや教材（学習の導入）

授業の導入では、「みんなが楽しめるように、今までと違うサッカーゲームをしよう」と児童に呼びかけた。具体的に提示した内容は、以下のものである。

- ボールは、布製のものを使用する（幼児用のもので、中に綿が入っており、当たっても痛くない）。
- キーパーはいない。ただし、ゴール前の台形の部分に入ったら、ペナルティーキック（PK）とする。
- ゴールは、室内用のもので、幅 180cm×高さ 120cm×奥行 100cm を使用する。
- 室内（体育館）で行い、ボールが壁に当たってもよい。ただし、ステージに上がった場合は審判（教師）が蹴って戻す。
- 1チーム5人でゲームを行う。学級全体（23名）を半数に分け、1分ごとに1人ずつ交代して行い、最終の点数で勝敗を決める。

児童は、室内でキーパーのいないサッカーが初めての体験であり、最初は戸惑う様子が見られたが、「ボールに当たっても痛くない」「PKが多く、シュートのチャンスが増える」というよさを実感しながら活動に取り組むことができた。特に、苦手と感じている女子児童は、シュートを決める経験から自信が高まり、積極的に活動する姿が多く見られた。



このように、児童が苦手と感じている内容について教材を工夫することで、自信をもって取り組むことができた。この自信が学習に対する積極性につながり、進んで練習や試合に取り組むことができ、技術も向上してきた。また、社会体育でサッカーチームに所属している児童にとっても、ボールの大きさや硬さ、PK ゾーンなどがあることで、いつものサッカーと違う意識で取り組むことができ、好評であった。



(2) 児童の話合いによるルール工夫

児童が話し合いから、より自分たちが楽しめるルールを考えて取り組めるように、ワークシートを活用して自分の考えをまとめ、次の試合のルールについて話し合う場を設定した。その際に、話し合いの視点が明確になるよう、ワークシートを、「人数や交代」「場所」「その他のルール」と3つに分けて記述できるようにした。児童は、「もっと少ない人数でやった方がよい」「キーパーは必要か」など、自分たちがより楽しめるように、ルールを考えていった。児童が考えたルールは以下のとおりである。

○ 学級 23 名を 2 チームに分ける。そして、「前半」「中」「後半」の 3 つ分けて（1 試合 3～4 人）試合をする。

○ キーパーはいない。その代わり、PK ゾーンを大きくする。そして、PK の場所を遠くする。

学級を 2 チームに分ける際も、「運動会の赤白」だけでなく、「スポーツテスト 50m 走の平均」や「学級での活動班」など、毎回違うメンバーになるよう児童が考えて取り組むことができた。このように、話し合いを定期的に設けることで、「次はこうした方が楽しむことができる」と考えながら主体的に活動することができた。

本実践では、6 回の試合を行った。この話し合いにより、少しずつルールや試合に出るメンバーを変えていった。このことで、「自分たちのサッカー型ゲーム」という意識を高めることができた。本実践では、チーム編成を毎回代えたが、チームのメンバーを固定することでチーム内でのフォーメーションや役割、動きなどを考える話し合いに進展していくことも可能となる。今後の体育学習で取り入れていきたい。



4 まとめ

一番の成果は、どの児童も意欲的に取り組むことができたことである。ワークシートの感想からは「PK でゴールできてうれしかった」「自分から声をかけることができた」「チームで協力して試合をした」などの肯定的な意見が多かった。特に、シュートをして得点を決めた感動がどのシートからも読み取れた。サッカーの醍醐味であるシュートする体験をより多くできるようにして、基本的な技術が向上できるような教材、教具の工夫を今後考えていきたい。

また、「自分たちでルールを考えて試合をする」という体験によって、自分たちらしさを発揮できる場となった。自分たちの学級がより楽しむためにどんなルールやメンバーで取り組むのがよいのかについて話し合い、決めていく活動は体育学習だけでなく、温かな学級づくりの面からも大切な活動となる。今後もこのような活動を意図的に設定して、より児童が主体的に考えて取り組めるように支援していきたい。

1 授業改善の視点

千田小学校の児童は運動することが好きである。休み時間には、グラウンドや体育館で遊ぶ児童がとて多い。しかし、そんな千田小学校の児童でさえ、長距離走の学習に対しては、「きつい」「疲れる」「遅いから嫌だ」という言葉が多く聞かれる。ただ走らされるだけ、速く走るだけの長距離走ではなく、「長距離走で身に付ける技能＝同じペースで走り続けること」を明確にし、それをできるようにすることで、進んで長距離走に取り組むのではないかと考え、実践することとした。

2 研究の内容・方法

(1) 走運動のための動きづくり

①分析したコーディネーション能力を高める楽しい運動（コーディネーション運動）の実施。

（1，2年次）

②股関節の柔軟性を高める「ブラジル体操」の実施。（3年次）

(2) 目標ラップタイム（めあて）の設定 ～達成する喜びを味わえるようにするために～

①100mあたりのペースの算出

前年度の「持久走記録会」のタイムから100mあたりのタイムを導き出し、それを1秒ずつ短縮することを目指す。→2.2kmの持久走記録会で前年度より22秒以上の短縮。

②ラップタイムの視覚化（100mごとのラップタイムのグラフを作成）

ペアの一方が100mごとに通過タイムを記録し、終了後100mごとのラップタイムを、表計算ソフトでグラフに表す。

(3) 自分に合ったペースを身に付けるために

①100mを繰り返し走り、ペースを身に付ける。

②少しずつ距離を伸ばす。

③1000m走

(4) ペース維持のための工夫

児童に問いかけ、自分たちで気付くことができるようにする。

3 実践の概要

(1) 単元名 長距離走～自分に合ったペースを見つけよう～

(2) 単元のねらい

- ・自分の体力を知り、自分に合ったペースで進んで走ろうとする。（関心・意欲）
- ・自分のペースをつかみ、自分にあった走り方を考える。（思考・判断）
- ・自分の設定したペースで走り続けることができる。（技能）

(3) 指導の実際

①走運動のための動きづくり→準備運動と本運動をつなぐ

ア) コーディネーション運動（1，2年次）

○走運動に必要なコーディネーション能力

リズム化能力→同じペースで走るために

連結能力→手足を効率よく動かし、リラックスして走るために

○運動例 各種スキップ リズム走 フープラダー など

イ) ブラジル体操

股関節の柔軟性を高めるために、走りながら縦横方向に股関節を動かす。

② ペース走

ア) 試しの1000m走

○「持久走記録会と同じように走ってみよう」の指示のみで走る。

○ラップタイムを視覚化し、自分の走り进行分析する。

○前年度の持久走記録会のタイムから、100mあたりのタイムを算出し、1000mならびに持久走記録

会での最終目標タイムを設定する（100mで1秒以上の短縮）。前年度の記録より、1年次 18 秒以上短縮、3年次は 22 秒以上短縮を目指す。

イ) 設定したペースの習得および修正

- 100mを繰り返し走り、設定したペースを身に付ける。
- 同じペースで走るために、走り方を工夫する（ストライド・リズム）。
- 200m、300mと距離を伸ばし、同じペースで走る練習をする。
- 「かなり楽」「ちょうどよい」「きつい」の3段階で自分の走りを自己評価し、必要に応じてペースの修正をする。

ウ) 1000mペース走（2年次のみ持久走記録会の半分の距離の1100mで実施）

- 練習したペースを1000m走で維持できるか確認する。ペアの一方が予めシートに記録された通過予定タイムと比較しながら、「ペースを上げよう」「いい感じ」などの声かけをする。
- ※1年次は②③を繰り返した。

(4) 児童の変容（1000m走より）

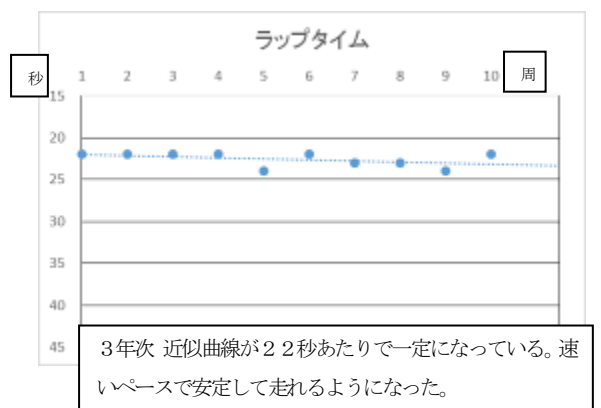
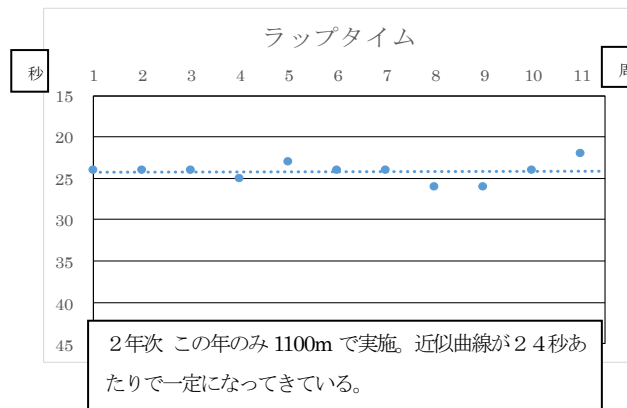
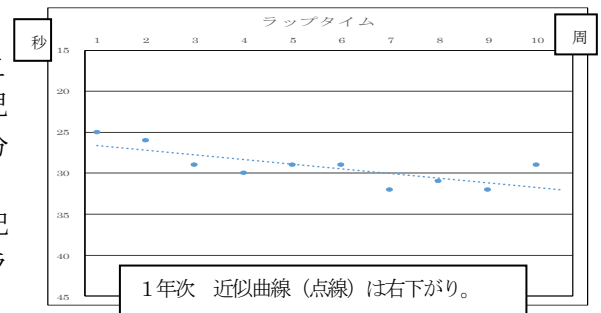
100mあたりのペースが 22～24 秒の児童をHグループ、26～29 秒の児童をMグループ、30～36 秒の児童をLグループとして、それぞれの変容を分析した。

- ① 単元内での変容 ほぼどのグループでも 100mごとのラップタイムは安定するようになる。
- ② 3年間での変容

<H・Mグループ>

前年よりペースを上げてでも安定したペースで走ることができる。持久走記録会でも目標記録を上回った児童が多かった。下回った数名の児童もその原因を自分で分析できている（体調不良、メンタル面など）。

グラフはA（女子）。持久走記録会5、6年で校内記録樹立。H・Mグループ児童はこのような傾向のグラフが多い。



<Lグループ>

安定したペースでは走れる（グラフが前年とほとんど同じ）が、前年を上回るペースで走ろうとすると、オーバーペースになってしまう児童がいた。自分でもその原因を分析できない。Lグループは運動経験の少ない児童がほとんどである（部活動に継続して所属していない、スポーツ少年団などに入っていない児童）。

4 まとめ

一人一人自分に合ったペース・目標記録を設定し、そのペースを維持できるようになったことで、記録は向上した。また、それができた喜びで、さらに意欲的に取り組む様子が見られた。運動経験の少ない児童も、練習によって一定のペースで走れるようになり、ある程度の達成感は得られた。しかし、前年よりも高いめあてを設定したときに、それが達成できない児童にとっては、活動がマンネリ化した感もあった。そのような児童には、運動経験を積ませること、別の方法で意欲をもてるようにすることが、より進んで運動に取り組めるようにするために必要だと感じた。

実践4 第4学年 算数「概数」より

1 授業改善の視点

児童は生活経験において、「およその数」を長さや重さなどで使用しているが、算数は正確な数（答え）が必要ととらえているため、実感を伴った理解をすることが難しい。そこで、児童の生活体験や具体的な操作活動を取り入れることで、児童自らが場面に応じて判断できるように支援していく。

また、本学級の児童は、課題の内容に対して見通しがもてない際に、取り組む意欲がなくなってしまうこともあるが、課題や活動の内容が明確になった時には、集中して課題解決していくよさがある。このよさを伸ばすために、文章だけでなく具体物を用意し、全員が見通しをもって課題解決していくことで学ぶ楽しさを感じられるようにしていく。さらに、グループで共通の課題を解決していくことで分かる喜びを実感できるように、ゲーム形式の課題を設定し、話し合いを通してグループの課題を解決できる授業を考え、実践することとした。



2 研究の内容・方法

○ 学ぶ意味が分かる授業の構想

課題をゲーム形式にすることで、児童が意欲的に取り組むだけでなく、ルールを簡略化していくことで、より見通しをもって活動できるようにしていく。また、児童は生活の中で概算をする経験が少ないと考えられる。そこで、ゲームを繰り返し行うことで、「およそに数で考えて計算した方が、早く簡単にできる」というよさを実感してけるように課題を工夫する。

○ 思考を深める学習活動

課題をグループでの活動とし、グループ対抗のゲームにしていくことで、共通の目的での話し合いを行い、お菓子の値段を計算できるようにしていく。また、まとめの場面では、グループでのよさや工夫を紹介していくことで、他のグループでのやり方を知り、自分たちの取組との共通点や相違点について考えられるようにしていく。



3 実践の概要

(1) 単元名 「がい数」

(2) 単元の目標

○概数について理解し、目的に応じて用いることができるようにする。

(3) 単元の指導計画（全7時間）

次	時	学習活動	教師の支援
四捨五入	1	・およその数の必要な場面が分かり、そのあらわし方について考える ・0～9のカードを使って、500に近い数を作る。	・概数の意味や使い方を実感できるように、児童の生活場面を想定した課題を設定する。
	2	・四捨五入のしかたを知る。	・四捨五入のやり方だけでなく、必要な位についても考えられるよう、図表を意図的に活用していく。
	3	・上から一けた、2けたの概数で表す方法を知る。	
切り捨て 切り上げ	4	・束にできる枚数を表す場合、切り捨てて概数にすることを考える。 ・何人分の車両を用意するかを考える場合には、切り上げて概数にすることを考える。	・四捨五入、切り捨て、切り上げの必要性が分かるように、比較しながら、どの方法を使うとよいかを考えられるようにしていく。また、なぜその方法がよいのかを児童が言葉で説明していく場を設定する。
がい算	5（本時）	・早く値段を計算するための方法をグループで考え、見通しをもってゲームに参加する。 ・値段を計算するゲームを通して、今まで学習した概数（見積もり）のよさに気付く。	・ゲーム形式での課題を設定することで、児童が意欲的に見通しをもって活動に取り組めるようにする。 ・活動の中から概算の必要性について理解できるよう、課題を工夫したり、グループ同士で解決法を共有したりする場を設定する。
	6	・動物園の入園者数のおよその数の求め方を考える。 ・加法・減法の概算の仕方を理解する。	・概算のやり方を理解すると共に、より簡単にできる方法について、友達同士で話し合う場を設定する。 ・児童の生活の中で起こりうる場面を想定した課題を提案して見積もるよさを理解できるようにしていく。
	7	・上から1桁の概数にした積の見積もりの仕方を考える。 ・上から1桁の概数にした商の見積もりの仕方を考える。	

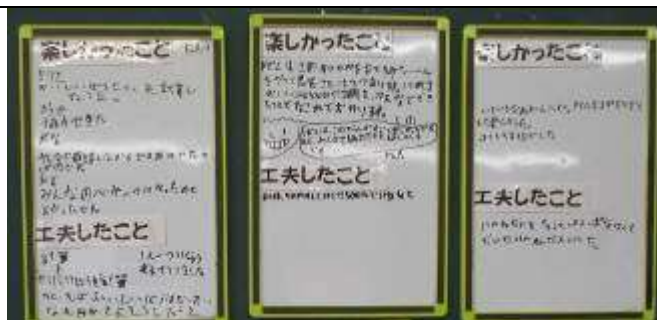
(4) 本時の計画（5／7）

① 本時のねらい

おやつ不值段を考て計算する活動を通して、見積もりや概算のよさに気付くことができる。

② 本時の展開

時間	T：教師の働きかけ C：予想される児童の反応	
5分	1 本時の課題を知る ◎ 目指せ！〇〇〇円 おかしは全部でいくらかでショー 2 ルールの確認 ・ 7つのお菓子から選ぶ（何個選んでもよい）。 ・ 班で設定金額に近いおやつを選んでホワイトボードに書く。 ・ 設定金額に1番近い班が高ポイント（設定金額を越えたら失格）。制限時間は5分	
30分	3 設定金額 500 円で1回戦をする。 C：おいしい棒が1本10円として、50本買ってぴったりだね。 C：アポロの山は、だいたい200円くらいだから。100円単位で考えよう。 C：私たちの班は、498円で計算したから、500円に近いね。 4 2, 3回戦をする。 C：前は100円単位だったけど、今度は10円単位にしてみよう。 評価：より早く計算する方法をグループで考えている。	
10分	5 まとめ T：今日のふりかえりを班でホワイトボードにまとめましょう。 C：話し合って値段を予想することが楽しかった。 C：何円まで考て計算すると時間がかかるので、100円単位で計算するように考えたほうが簡単だね。 C：自分の班と同じ方法を他の班がやっていたので、よい方法だと思った。 評価：見積もりをして概算するよさに気付く。	



4 まとめ

児童も指導者も楽しんでいることが伝わる授業だった。また、魅力的な課題設定や教材・教具の準備によって、児童がどんな学習活動をするのかが見えていた。グループでの話し合いの中で、素早く計算して「(設定金額を) 超えた!」というやりとりや、最後の楽しかったことや工夫したことを振り返る時に「協力してできた」や「だいたいの値段にした」という考えなど、児童のよさがたくさん見えた。

協議会では、以下の内容を大事にすることを全教員で確認した。

- ・ 教材開発の重要さ。
- ・ 児童との楽しい問答を大切にすること。
- ・ ねらいに迫るための楽しいゲームとルールの工夫。
- ・ 児童が活動を通して気付いていけるようにすること。
- ・ 児童が引きつけられる課題設定（体験とつながっていること）。
- ・ 視覚的に分かりやすい教材、教具の準備。
- ・ ねらいの明確化。これを学ぶ意味や必要性の理由を教師自身がもつこと。

1 授業改善の視点

児童は、日常生活の中で、いろいろな形に囲まれて暮らしている。遊びを通して折り紙や粘土、積み木などでいろいろな形を作ったりする経験もしてきている。また、「さんかく」「しかく」「まる」という言葉も日常的な言語として使っている。しかし、その知識は漠然としたものであり、大きさや色、材質などが混在したものになりがちである。そのために、具体物と接する時間や経験を多く取っていく。普段何気なく目にしていた図形を「転がす」「積む」といった操作活動を十分に行うことで、児童自身が根拠をもって仲間分けをすることができると考える。



さらに、「形当て」では、実際に立体に触る活動を通して、特徴を明確にとらえ相手に伝えたり、質問しながら類推したりしていく。その中で、友達同士で自分の意見を交換していくことで「協同的な学び」が生まれ、学ぶ楽しさを味わえるような授業を考え、実践した。

2 研究の内容・方法

○ 思考を深める学習活動

仲間に分けた形に「名前をつける」ことにより、分類の仕方について、その根拠を自分なりの言葉で説明できると考える。お互いの考えを出し合い学び合うことによって、概形や特徴についての着目の違いによって分類も異なることに気付く。



○ 意欲を高め、学びをつなげるまとめと振り返り

「言語活動を重視した授業」で発問は意図的に行い、児童の考えを引き出すようにする。本時のまとめは「形当てクイズ」をし、関心・意欲を高める。その活動が単なる遊びで終わらないように、形の特徴を教師がヒントとして言葉で伝え、児童が見通しをもって活動できるように支援する。

3 実践の概要

(1) 単元名「かたち（１）」

(2) 単元の目標

身近な立体についての観察や構成などの活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を豊かにする。

(3) 指導計画



次	時	学習活動	教師の支援
しょう 形遊びを	1	「転がそうゲーム」 ・転がる形と転がらない形について考える。	「よく転がる形はどれか」「なぜこの形を選んだのか」「転がる形と転がらない形はどこが違うのか」発問を意図的に行う。
	2	「高く積もうゲーム」 ・高く積み上げやすい形とそうでない形の違いについて考える。	「倒れないように高く積むには」の発問により、目的が明確に児童に伝わるようにする。「どのように積んだのか」を考えることにより、面の形や広さ、形状（平面、曲面）に目を向ける。
	3 本時	「仲間集め」 ・集めた空き箱などを、形に着目して、同じ形の仲間作りをする。	「分類の観点の明確化」どのような観点で分類をしたか児童が説明しやすいようにインタビューをする。
	4	「形当てゲーム」「復習問題」 ・立方体、直方体、円柱、球のどれかを手で触り、どの形であるか考える。	「円柱のつぶれた形（チーズの箱）はどこの仲間に入るか」を考える場を設定する。
こう 絵を描	5	「形のうつし絵」 ・面を写し取った形をもとにして絵を描く。	同じ立体でも、写す場所により形が違うことに気付かせ、箱の面には、いろいろな形があることを押さえる。

作 品 を つ く る	6	「形を生かして作品作り」	立体の機能や特長を生かして、意欲的に作品作りに取り組めるよう空 き箱等を用意しておく。
	7	・集めた空き箱などを利用して、作りたい物を作る。	

(4) 本時の計画 本時の計画 (3/7)

① 本時のねらい

集めた空き箱などを、形に着目して仲間分けをすることができる。

② 本時の展開

時間	T：教師の働きかけ C：予想される児童の反応		
5 分	1	本時の課題を知る。 ◎ おなじかたちになまえわけしよう	
		T：今日は使った物を片付けます。この中から、欲しい形が取り出しやすいようにするには、どうしたらよいかな。	
15 分	2	班ごとに仲間分けをする。 C：転がる、転がらない〈2つに分類〉。 C：積める、転がる、積めて転がる〈3つに分類〉。 C：ましかく、ながしかく、まる、ながまる〈4つに分類〉。	
10 分	3	みんなで考えを聞き合う。 C：2つに分けました。この仲間は、転がる仲間です。こちらは、転がりません。 C：3つに分けました。この形はとんがりがある平らです。こちらはとんがっていないので、よく転がります。この仲間は平らなところと、丸があります。 C：4つに分けました。サイコロの形、長四角ばかり、まん丸い、丸が伸びている形に分けました。 評価：分けた理由を話すことができる。(インタビュー)	
ま と め	4	形当てクイズをする。 (確認問題、次時の活動の予告) ・形を見ないで、ヒントで形を当る。自分の箱の形から、同じ仲間を見付ける。	
5 分	5	学習を振り返る。 ・今日の学習の感想を発表する。	



4 まとめ

端的で分かりやすい発問がなされ、何をするのかが児童の頭の中で見えている授業だった。同じ仲間の箱を前にして、「同じにする?」「全く同じ?」等々、友達と相談しながら活動が進み、児童のつぶやきが多く発せられた。発問を工夫することにより、思考がスムーズにいくことが明らかになった授業だった。

思考の深まりについて、「類比」「対比」「理由」の3つの視点でも検証した。比べたり、根拠を表したりするときに思考が活性化される。今後の授業でも意識していきたい。

以下の視点を大事にすることを、全教員で確認し合った。

- ・児童の話合いの中で類比・対比を行い、思考を深めること。
- ・本時の◎や活動を分かりやすく提示すること。
- ・類比・対比そして収束の過程を大事にすること。

1 授業改善の視点

説明文の学習では、「問いの文」「答えの文」という意識も定着してきており、既習の「エンペラーペンギンの子そだて」では、文末表現「～でしょうか」に着目して「問いの文」を容易に見つけることができた。本単元の学習では、問いの文を探して答えを見つける喜びでなく、自らの「なぜ」（疑問）を問いにして問題を出し合い、みんなで楽しむなど、「なぜ」を単元を中心に据えて学習を進めていく。

本教材は、児童の興味が深い、昆虫の「蛭」を題材にした説明文である。特徴として、一つの「問いの文」に二つの問いが入った説明文である。また、形式段落に出てくる主語を意識させることで、段落に何が書かれているかがわかりやすい内容である。蛭が出始めている季節なので、「蛭のことを詳しく知りたい」と子どもたちが興味や関心をもって学習を進められるような授業を考え、実践した。



2 研究の内容・方法

○ 思考を深める学習活動

既習の主語・述語の学習をふり返ることで、主語が意識できるように支援したり、答えだと思ふ理由を話し合ったりすることで、一つ目の問いの答えを根拠にもとづいて考えられるようにする。

○ 意欲を高め、学びをつなげるまとめと振り返り

学習の最後に、自分の「なぜ」の思いやできるようになったことを振り返る場を設定し、児童が単元を通して「問い」を意識できるように支援する。

3 実践の概要

(1) 単元名 「ほたるの一生」(説明文)

(2) 単元の目標

- ほたるの、一生の過ごし方に関心をもち、カレンダー形式の表にするとともに、そこから分かるほたるの特徴的な様子やできごとについての感想を、一文にまとめようとする。【関心】
- 時間の順序に気を付けて、内容の大体を読んだり、大事な言葉を書き抜いたりし、「問い」と「答え」のつながりを確認することができる。【読む】
- 語と語の続き方に注意して書くことができる。【書く】
- 文や段落における主語と述語の関係や、時間を表す言葉の使われかたを考えることができる。【伝国】

(3) 単元の指導計画(全10時間 本時 3/10)

次	時	学習活動	教師の支援
1 つかむ	1	全文を通して音読する。	・ペアで読み合うなど、活動の工夫をする。
	2	問いの文を見つけ、一つの文に問いが二つあることを理解する。	・文末の表現に着目させ、②段落に目が向くようにする。
2 読む	3	・一つ目の問いの答えを探す。(本時)	・一つ目の問い(目的)にあった答えを見つけられるようにする。
	4	・「なぜなぜ」大会をする。	
	5	二つ目の問いの「どのように一生をすごすのか」の答えを探す。	・写真に対応する文や段落を考えられるようにする。 ・写真と対応した文をもとにして、「～する〇〇」という形で、文の主語を文末にするようにしていく。 ・段落の主語を確認して、書かれていることをつかむ。 ・時を表す言葉に着目させて、幼虫の期間の長さにつづかせる。
	8	・紙面の写真をお話の順に並べ替え ・紙面の写真に題名を付ける。 ・ほたるの形態の変化を読み取る。 ・ほたるの一生をカレンダーにまとめる。	
3 表現	9	二つ目の問いの「どのように一生をすごすのか」に対する答えを自分なりに書く。	・カレンダーの特徴に着目させ、自分なりの考えをもてるようにする。
	10	二つ目の問いの答えを一文の形にまとめる。	・「ほたるの一生は〇〇〇〇一生です。」という文にまとめられるようにする。

(4) 本時の計画 (3/10)

① 本時のねらい

- 文章を読み、一つ目の問い「なんのために光るのか」の答えを見つけることができる。
- 自分の「なぜ？」を見つけ、問いの文をつくることができる。

② 本時の展開

場面	T：教師の働きかけ C：予想される児童の反応
25分	1 全文を通して読み、答えが書いてある段落を探す。 T：◎一つ目の問い「なんのために光るのか」の答えを見つけましょう。 C：答えは③段落にありそうだ。 C：「おすめすの間のしんごう」かな？ C：「めすを見つけ、けっこんする」だと思います。 C：「何のため」だから、目的だね。 T：見つけた答えを、ノートに書きましょう。 C：ほたるのおすめ、めすを見つけ、けっこんする<u>ために光ります。</u> 評価：一つ目の問いの答えを見つけ、ノートに書くことができる。(発言・ノート)
17分	2 自分の「なぜ？」の思いを問いの文にする。 T：ほたるの「なぜ」をたくさん見つけて問いの文を作り、問題を出し合ひましょう。 C：なぜ、ほたるは強くよく光るのでしょうか。 C：なぜ、ほたるのめすは500 こから1000 こもたまごをうむのでしょうか。 C：「なぜ」がたくさん集まったから、発表会をしたいね。 評価：自分なりの問いの文をカードに書くことができる。(カード・発表)
3分	3 今日の学習を振り返る。 C：問いの答えを見つけることができて、よかった。

4 まとめ

授業中、児童が「なんのために光るのかの答えが見つけれない、どれも違う！」となった時、「やった！」と思ったと言う。児童の反応を予想して、瞬時に次の支援方法を考え、的確に支援していく技術を高めていきたいと改めて実感する授業だった。

協議会において、以下の視点を大事にすることを全教員で確認し合った。

- ・何をすればよいか明確になる簡潔な投げかけを行う。
- ・知的好奇心をくすぐる課題設定を行う。
- ・まとめ・振り返りを大切にする。
- ・主語―述語を正しくとらえられる指導をする。
- ・学校生活の各場面で、簡潔で分かりやすい話し方、発問をしていく。

実践7 第2学年② 算数「長さ」より

1 授業改善の視点

これまで児童は、第1学年の「大きさをくらべ」の学習で、直接比較や間接比較、任意単位によって長さを比べられることを学習してきた。本単元では、児童が普遍単位 (cm、mm) を用いる必要性に気付き、活用できるようになるために、長さを比べたり測ったりする活動を取り入れる。

また、児童は生活科の野菜の観察の時、「少し大きくなった」「手のひらくらいの大きさ」などと表現しており、具体的な数値が明らかではない。そこで、他教科と関連付けて、普遍単位の必要性に気付いたり、繰り返し測定を行いながら量の感覚を身に付けたりできるような授業を考え、実践した。



2 研究の内容・方法

○ 思考を深める学習活動

自分だけが分かる個別の任意単位を使った表現でなく、みんなが持っている物を基にした共通単位を使うことで、より相手に伝わるのが気づけるように、児童の意見が全員に伝わるかどうか実際に確かめたり、グループで考えたりする時間を設定する。

○ 学ぶ意味の分かる授業の構想

生活科の授業と関連づけて、大切に育てている自分の野菜の背の高さを伝える方法を考えることを課題にすることで、意欲をもって活動できるようにしていく。



3 実践の概要

(1) 単元名 「長さ」

(2) 単元の目標

- 普遍単位を用いるよさに気づき、身の回りのものの長さを測定しようとしている。【関心・意欲・態度】
- 普遍単位の必要性に気づき、長さの表し方を考え表現している。また、1 cmより短い長さや、長さの加減の仕方を考えている。【数学的な考え方】
- ものさしを用い、cm、mm を単位として測ることができ、決まった長さの直線を引くことができる。また、簡単な長さの加法、減法の計算ができる。【技能】
- 長さを表す単位を知るとともに、長さを表すには、cm、mm 単位を用いればよいことを理解している。また、長さについての豊かな感覚をもっている。【知識・理解】



(3) 単元の指導計画（全10時間）

次	時	学習活動	教師の支援
1 長さの比べ方	1	・多くの人が分かるように野菜の背の高さを言葉で伝える方法を考えて、共通単位が必要なことに気付く。	・個別の任意単位ではなく、共通単位を使った言葉で表現できるようにする。
	2	・工作用紙の目盛りを共通単位とした棒を作り、身近なものを測定する。 ・目盛り何ます分かで測定結果を表現する。 ・ペアで、長さ比べをする。	・工作用紙1ます分の長さがどれだけかを理解し、共通単位で測定できるようにする。 ・どちらがどれだけ（何ます分）長い言葉で伝えられるようにする。
2 長さの表し方	3	・葉書の横の長さを測定する。 ・工作用紙の1目盛り分の長さが1 cmであることを知る。 ・工作用紙の1ますを使って1 cm探しをする。	・cmが普遍単位として使われていることが理解できるように、身の回りのものを例に挙げて示す。
	4	・1 cm目盛りの工作用紙の棒でテープや線の長さを正しい測り方で測定する。 ・10 cmに近いものを探す。 ・はしが出た時の表し方を考える。	・長さの測り方を何通りか見せて、正しい測り方を理解できるようにする。 ・10 cmに近いけれど、10 cmではない物を用意して、はしを表す単位が必要なことに気付けるようにする。
	5	・ものさしで、細かい目盛りが1 cmをいくつかに分けた1個分かを調べ1 cmが10 mmであることを確かめる。 ・ものさしで棒の長さ○cm△mmを測定し、単位を使って書き表したり読んだりする。 ・ものさしを使って、長さを測る。	・ものさしの拡大図を用意して、正しく読めているか確かめられるようにする。
	6	・ものさしを使って、決まった長さの直線を引く。 ・ものさしで測った○cm△mmの長さを□mmで表現する。	・1 cm=10 mmなど単位換算の元となる事を確認したり、ものさしの拡大図を読み取ったりして○cm△mmの長さを□mmで表現できるようにする。

	7	□mm で表された長さを、○cm△mm で表現する。 - cm、mm の単位で表された長さを大小比較し、等号や不等号を使って表す。	mm からcmを用いた表現の仕方も身に付けることで、2つの長さの大小を単位を揃えて比べられる。
3 長さの計算	8	- 赤の線をつなげた長さを測り、加法の計算で求める。 - 赤と青の2本の線の長さの違いを減法の計算で求め、実際に測って確かめる。 - cmとmmの複名数で表された長さの加減の方法を考える。	同じ単位のところをそろえて計算することを理解できるようにする。
4 まとめ	9 ・ 10	既習事項の確かめをする。	児童がつまづいているところは無いか把握し、支援する。

(4) 本時の計画 (1 / 10)

①本時のねらい

- 野菜の背の高さを、多くの人が分かるように言葉で表現する方法を考える。
- 野菜の背の高さを、多くの人が分かるように言葉で表現するためには共通単位が必要なことに気付く。

②本時の展開

時間	T : 教師の働きかけ C : 予想される児童の反応
5分	1 本時の課題を知る。 T : ◎じぶんの やさいの せのたかさを ことばで つたえよう T : 誰に知らせたいですか。 C : お母さんです。 C : おじいちゃんです。
25分	2 野菜の背の高さを言葉で表現する。 T : 自分の野菜の背の高さは、どのくらいでしょうか。 C : これくらいです。 C : 腰の高さくらいまでです。 C : 手のひら6個分くらいです。 3 野菜の背の高さを言葉で伝える方法を考える。 T : みんなが分かる言い方をグループで考えましょう。 C : みんなが持っている同じ大きさの物を使えば分かるかな。 C : クレパスの箱は？ 評価：野菜の大きさを、多くの人が分かるように表現する方法を考える。【発言・ノート】
1 5 分	4 野菜の背の高さを言葉で書いて発表する。 C : ミニトマトの背の高さはクレパスの箱5個分です。 C : キュウリはものさし6本分です。



4 まとめ

生活科の学習で大切に育てている一人一鉢の野菜を教室に持ってきたことで、どんな学習が始まるのかと、児童の関心が高まっていた。また、授業開始前に、自分が育てているキュウリの大きさがバナナくらいだからバナナという名前にしたと、参観者に紹介する姿も見られ、本時の野菜の大きさを言葉で伝える学習を始めている様子もあった。児童にとって興味関心の高い教材を用いたことで、自分から進んで思考活動を行うことができた。

また、児童から授業の初めに「このくらいの高さ」「支柱より高いくらい」という意見が出たが、「このくらいってどのくらい」「支柱の高さはそれぞれ違う」と一つ一つの意見について本当にみんなに伝わるかどうか考えることで「これでは伝わらない、どうしたらいいだろう」という課題が生まれ、相手に伝える方法を思考する姿が見られた。児童が活動する中で、30 cmものさしは全部同じ長さなので、30 cmものさしがいくつかで、みんなに伝わることに気付いた。多様な考えをつないでいくことで、本時のねらいである共通単位の必要性にせまることができた。

次時に、30 cmものさし以外で共通単位になるものを探す活動を行った。児童は、引き出しの中に共通単位に

なるものがあることに気付き、クレパスや教科書等を使って野菜の背の高さを表し、全員で確認することができた。児童の身の回りに、手に取って試行錯誤できる教材の必要性を再確認できた。

児童が本時の課題を達成するために、育てている野菜に鉛筆や自分が持っている定規を当てるなど、進んで活動する姿は見られた。しかし、発表の場面では、自分の考えを進んで発言する姿が少なかった。一人一人の考えを記述するワークシートを用意することで、自信をもって発言できるための支援になると考える。考えをまとめやすいワークシートの工夫、児童が自分の考えを書く時間、児童の考えを見取り、考えがまとまらない児童の支援をすることが今後の課題である。そして、今後も児童が考える必然性のある課題を見付けていく。

IV 成果と課題

1 学校評価結果より

「平成 28 年度末学校評価」の結果は以下のとおりである。学校体制による継続した取組によって、児童の意欲や肯定感の高まりが見られる。

・「授業が楽しい」と回答した児童	(H27 末)92%→(H28 末) 97%
・「交流活動に満足」と解答した児童	(H28. 7)90%→(H28 末) 96%
・「学級が楽しい」と回答した児童	(H27 末)94%→(H28. 7)94%→(H28 末) 97%
・「生活習慣のめあてを守っている」児童	(H27 末)78%→(H28. 7)85%→(H28 末) 89%
・単元末評価テストの全児童平均点	(H28. 7)国語 82.3 算数 82.9→(H28 末)国語 85.5 算数 84.8

保護者評価は以下のとおりである。連携・協働によって、取組が家庭にも広がっている。

・家庭学習が継続できるように励ましている	(H28 末) 84%
・家族で話し合い、生活習慣づくりに努めている。	(H28 末) 88%
・家族団らんを大切にし、子どもの夢や希望を応援している。(H28 末)	97%

保護者からは、以下の声が寄せられている。

- ・「授業で見学体験し、学んだことをグループごとに書いたり話し合ったりして、貴重な体験ができています。大人になってからもきっと役立つことがたくさんあると思う。」
- ・「学校での出来事を家で話してくれるので、ちゃんと聞くように心がけています。そうすることで、今までできなかった勉強ができるようになったら、たくさん誉めてあげることができます。子どもが自信をもって、伸び伸び活動できるよう応援しています。」
- ・「責任感が強く、役割意識をもって取り組んでいます。何より学校生活が楽しいと言い、何事にも努力する姿が昨年より成長しています。」
- ・「毎日しっかりと勉強するようになり、勉強が楽しくなってきたと言っている。これからは家庭学習が継続できるように応援していきたいと思います。」
- ・「学習は日に日に自分から行えるようになり、頑張っているようです。今は、『はきはきと受け答えすること』を大切にして、誰に対しても気持ちのよい関わりができるようになってほしいと思って、指導しています。」

2 校内研修より

(1) 授業改善

授業研究では「分かる喜び 学ぶ楽しさ」の研究テーマに向けて、以下を深めた。

視点1：身に付けたい力の明確化と単元構想

視点2：学ぶ意味が分かる授業の構想

視点3：思考を深める学習活動

視点4：意欲を高め、学びをつなげるまとめと振り返り

子どもにとって考える必然性のある学習課題が設定され、考えを交流する学習活動が多く行われた。参観者も、見る視点を明確にして授業に臨んだ。ワールドカフェ方式を取り入れた協議会では、成果と改善策について積極的な議論が展開された。大洋紙に記録しながらの協議を受けて、主任が研修だよりの発行を続けた。授業研修の積み重ねが、教員一人一人の意識の高まりとなり、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」の育成につ

ながっている。

公開授業後に授業チェックリストを活用し、自分の授業に生かせること（自己改善策）を書き出した。様々な授業を目にしながらか授業づくりについて考えたことが、私たち自身の授業改善への意欲につながっている。

今後、次期学習指導要領に向けた研修をさらに進める必要がある。子どもの思考を十分深めるために、
①場の設定 ②発問 ③言語活動（伝え合う活動）の視点からの研修を継続する。

(2) Web配信集計システム・月例テスト

- ・ 毎月の結果分析により、補充指導事項や指導の視点が明らかになった。各教室で、確認問題等を活用した指導を繰り返し行い、その積み重ねが児童の正答率の上昇につながってきた。
- ・ 過去問題やサポート問題の活用をさらに進めること。今後も継続する指導の重点箇所を読み取り、学習に軽重を付けながら指導を進め、結果分析をさらに授業実践につなげていく。

(3) 中学校区の取組・朝学習等

- ・ 朝学習時に、家庭学習の確認、漢字計算ミニテストを実施したり、朝読書（15分間）を実施したりすることにより、基礎学力定着に効果が上がっている。朝学習の計画的な運用が進んでいる。
- ・ 中学校区の学習習慣定着の取組を継続し、計画的な発信と評価により、家庭学習の定着率を上げることができた。
- ・ 身に付ける学力について小・中学校9年間を見据えて考察し、家庭学習の内容・質の深まりにつなげることを今後も継続する。

V おわりに

「先生、ぼくのキュウリが大きく育ったよ。バナナみたいな大きさだからバナナちゃんという名前だよ」2年生の算数学習が始まる前のうれしい一コマである。子どもたちは、思いや願いをたくさんもち、それを伝えようとする意欲に満ちあふれている。

今年度の千田小学校の研究テーマは「分かる喜び 学ぶ楽しさ」である。このテーマに迫るために、全職員で共通に理解し、授業改善の基盤にしたものが、「児童のよさ、学級のよさを見取り、そのよさを更に伸ばす授業」である。指導案を作成する際には、「学級、児童のよさ」「そのよさを伸ばすための支援」について、十分に協議した。そして、授業後の協議会においても、児童の姿から授業を振り返り、よさを認め、さらなる支援について意見を出し合うことを意識してきた。

また、授業改善の中核を「思考を深める学習活動」として、話し合う活動を意図的に設定し、支援してきた。しかし、話し合いの場を設定しただけでは児童の思考を深めることができない。そこで、職員研修で「児童が思考すること」について共通理解を図った。千田小学校では、児童の思考を「類比する（共通点を見付ける）」「対比する（違いを見付ける）」「理由を明確にする」の3つの視点に分け、この視点が深まるような教材、発問の工夫に取り組んだ。児童は、話し合いの中から「友達の意見との共通点や違い」「なぜ、そう思ったのか」など、思考を深めながら活動に取り組むことができた。

「学力向上と生活指導は両輪である」と言われている。児童が分かる喜びや学ぶ楽しさを感じ、たくさんの意見を交換するためには、温かい学級の雰囲気は不可欠となる。千田小学校では、温かい学級づくりのために、「全校一斉型ソーシャルスキル教育」や「異学年交流活動」を重点的に取り組んできた。今後も、授業での支援だけでなく、ベースとしている学級づくりを大切にして、児童が分かる喜びと学ぶ喜びを感じられるように、全職員一丸となって取り組んでいきたい。